

小学生向け認知症サポーター養成講座のこと

2018年を迎えて最初の通信です。お届けは節分を過ぎたころになりますから、新年のごあいさつには少し遅いですが、あらためまして本年もお世話になります。本年が皆さまにとってよい一年でありますように。

昨年から市内の小学校の認知症サポーター養成講座に伺っています。この小学校は5、6年生を対象に行っていて、去年は5、6年生一緒に2時間使ってしっかり勉強しました。今年は去年の5年生が6年生になっているので、別々に行うこととしました。5年生は小学校所在地の高齢者相談センター職員が担当され、基本的な説明と手作りの台本によるロールプレイでした。さっきまでマジメな顔で病気の説明をしていたお兄さんが（看護師）認知症のおじいちゃんに小遣いをせびる子どもを熱演するなど、忙しい業務の中に準備された成果が現れていました。子どもたちの心に残ったことと思います。

私は6年生の授業を担当しました。昨年基本的な勉強をしているので、少し難しいクイズ形式で進めました。「おばあちゃんが、お財布をお母さんが盗ったと言う」、「おじいちゃんが夜中に大声を出しながら家中の電気をつけて回る」などといったかなりシビアな行動言動に対して「あなたならどうする？」と問うものです。『盗む』事例の回答例は、「お母さんのみかたになる」「あんまりひどいから嫌いになる」「一緒に財布を探す」の3つ。去年の講座を覚えてくれていたようで、ほとんどが模範解答の「一緒に探す」に手をあげてくれました。でも、日ごろ一生懸命介護しているお母さんをドロボー扱いするなんて、子どもにしてみれば「おばあちゃん嫌いだ」と思っても当然です。それでも『忘れる病気』になったことで起きることだから、おばあちゃんの気持ちを受けとめてあげたい。三択の回答どれもが決して間違っていないし、このほかにだって答えはあることを理解してもらえるように進めたつもりです。日々認知症の人と接している私たちも、正解がない中で悩みながら介護しているのですから。また少し欲張りですが、「その人（認知症の人）の気持ちになって考えるのは、友だちとの関係でも同じ」ということも伝えたかったことです。

しかし、半世紀以上前、私が小学生だった当時は『認知症』という言葉さえありませんでした。超高齢社会を生きる今の子どもたち、なかなかタイヘンですね。子どもたちのまなざしがまぶしい冬の日でした。

（代表理事／小島美里）

